

海の森づくり推進協会小史

海の森づくり推進協会 名誉会長 松田 恵明



当協会の創設に関わった境一郎先生、矢野恒信氏、佐野隆三氏、阿部孤柳先生、金榮トン先生、岩井克己氏、山本浩一氏、浦田俊信氏、納土伸男氏、古谷和夫氏も既に亡くなりました。深く感謝をすると同時に、ご冥福をお祈りします。

1. 松田恵明は1959年に酪農学園植苗塾修了後、北大水産学部・大学院博士課程を修了し、11年余のアメリカ留学後、1980年に帰国し鹿児島大学水産学部国際海洋政策学講座助教授に着任し2005年に定年退職した。現在、「海の森づくり推進協会」の名誉会長。
2. 境一郎氏との出会い：1980年代の漁業経済学会で境一郎先生と意気投合し、日本での海の森づくり運動を開始した。鹿児島での最初の仕事は、境先生を鹿児島大学の非常勤講師としての引き受けと鹿児島での「海の森づくり」を実践する漁協探しであった。
3. 東町漁協(1994)の宇都時義氏との出会い：鹿児島県内には70近くの漁協があったが、その中で、耳を傾けてくれたのは宇都時義氏のみであった。3か年計画で1,000万円を投資しようというものであった。その結果、東町の3か所の地区で計11本の種糸付きの100m綱が延縄式に張られ、「海の森づくり」が始まった。初年度の生産結果は、非常に良かったが、予算は大幅に超過し、生産物の販売もできず、境先生は信用を無くし、東町に出入りができなくなった。その後利用できる経費は50万円/年と成って、この事業は1998年に終わった。
4. 1995-2001年：境は徳洲会の徳田氏のサポートを得て、鹿児島県徳ノ島に拠点を置き、「海の森づくり」に向けた執筆・啓蒙活動に専念し、松田は東町漁協との関係修復と鹿児島県内外の漁協での啓蒙活動に専念した。これらの啓蒙活動は、2000年に「海の森を造ろうの会」に繋がり、高知県、愛媛県、石川県、富山県、長崎県、熊本県に及び、2002年にはNPO法人「海の森づくり推進協会」の誕生となった。「海の森づくり」は2002年に出版された水産庁の水産振興にあったものを使わせていただいた。

5. 2002年に主たる事務局を埼玉市に置き、横浜を中心として活動を続けてきた。しかし、この活動は、2003年の神奈川新聞1面に大きく取り上げられ、神奈川県では、「当協会による地元漁協への営業妨害」（これは「デマ」でした。）とみなされ、これが2011年まで続き、その結果、当協会は、神奈川県では、活動ができなくなり、2005年に事務局を松田が在住する秋田県に移した。このような活動は、現在、都市型の海の森づくりを展開している横浜拠点の社）里海イニシアティブに受け継がれている。当協会はその創設時からこの活動にかかわっている。
6. 当協会は2003年以降、年1回種糸の斡旋と「海の森づくり」に関連するシンポジウムをオープンで実施し、2005年には第1回のコンブサミットを大村市で開催し、後3回サミットを継続した。山田正彦氏、久原俊信氏の協力もあり、長崎県が日本の「海の森づくり」の最先端の場となった。中国大連と青島を含む国内外の研修ツアーも3回実施された。多摩川河口の干潟観察会、観音崎磯の海藻観察会、東京海洋大学での海藻押し葉体験教室等も現在は休止しているが、恒例イベントとしてやっていた。また、特別賛助会員制度も立ち上がり、東成海洋開発株式会社、新日本製鐵株式会社、TBR株式会社、NPO教育開発研究所、向海産、(株)アントアールが参加し、当協会の財政基盤に大きく貢献した。
7. 2002-12：海洋施肥剤試験の実施：当協会の堀田健治氏が開発し、韓国の東成海洋開発株式会社が製造した「海洋施肥剤」の試験が、千葉県のみならず、長崎県壱岐東部漁協、上対馬町漁協、鹿児島県東町漁協、愛媛県遊子漁協、秋田県男鹿市、八森町で実施された。（計11トン余）いずれも施肥効果は認められたが、日本では、輸入施肥剤の販売はむずかしい。→国産品が求められている。
8. 2011：東北大震災の結果、当協会に種糸を供給していた重茂漁協が大被害をこうむり、種苗生産施設は全壊した。当協会は即座に「重茂漁協を支援する会」を立ち上げ、募金活動を始めた。その結果、計130万円余（うち100万円は中野利弘氏が理事長をしているオイスカからの寄付）の寄付が集まり、重茂漁協には100万円相当の顕微鏡一式と残金総額を寄付した。
9. 2011-2013；当協会の活動が、堀井啓一氏、渡部幸男氏、大森昭義氏、南條祥一氏、佐藤勝司氏、三浦幹夫氏、佐藤龍男氏を中心とした秋田県の「新しい公共事業」に取り上げられた。

10. 2012-2015:大分県出身の藤野修二郎氏・諫本信義氏が中心になって前田建設工業のMAEDAグリーンコミット支援事業に参加し、大分県東国東郡島村松原地区で、試作ブリケットの施用試験を実施した。
11. 2013:日本食品分析センターの試験結果:北海道函館市南茅部町のコンブ2年物(一流品)と長崎県壱岐東部漁協のコンブ1年物との違い:コンブ1年物の灰分含量(38.07g/100g)はコンブ2年物(15.07g/100g)に比べて圧倒的に多い。この灰分の中に、多くの栄養素が含まれている。→これはこれからのコンブ・薬品業界に大きく関連する。
12. 2002-2019:壱岐東部漁協故浦田俊信氏(元壱岐東部漁協長)の貢献:故浦田氏は持病に悩まされながら、壱岐東部漁協長として、ベストをつくしました。2002年の当初から、「海の森づくり」に強い関心を示し、地元の再生と結び付けました。壱岐東部漁協を実験漁協として6次産業にまで結び付け、後は後継者の育成だけを残して他界されました。非常に残念です。彼の貢献に対して、深く感謝すると同時に、ご冥福をお祈り申し上げます。
13. 2010:水産ジャーナリストの会の2009年度賞受賞。
14. 2013:秋田県環境大賞(環境保全の部)受賞。
15. 秋田県(2012-16)との連携、早取れコンブ・ワカメの小売り価格の設定:800円/2kg、READYFORの結果:80万円の募金調達(この80%は当協会の会員から)。秋田県の事業は、米山伸子氏、加藤真一氏、三浦幹夫氏が継続している。「もう一つの森づくり」として日本環境財団の2年間の「環境NPO助成」に引き継がれた。
16. 2018年度以降:原口博光氏を中心に、現国会議員(衛藤征士郎氏、太田昭彦氏、山本幸三氏、原田義昭氏)に会い「木の総合文化を推進する議員連盟」の運動の中に、「海の森づくり」を取り上げてほしいと陳情してきた。
17. その他当協会にとって忘れられない人として、白洲敏郎氏、渡部幸男氏、中川雅夫氏、加藤敏朗氏、オオニシ恭子氏、矢澤一良先生、菅原啓介氏、松本憲二氏、野村譲氏、宇都時義氏、堀井啓一氏、菅原広二氏、松本忍氏、笠原文善氏、日和佐信子氏、陶敏彦氏、笠岡義雄氏、浜田靖彦氏、猪口茂樹氏、木曾英滋氏、岩上哲也氏、岩崎和彦氏、佐藤安紀子氏、末竹和行氏、岩崎政彦氏、加藤英之氏、松

本隆司氏、原口博光氏、松橋鐵治郎氏、横山次郎氏、成田省一氏、斉藤 浩氏、斎藤晃顕氏、永菅裕一氏等がおります。ご支援誠にありがとうございました。

18. 時代は大きく変わりました。地球温暖化の影響をもろに受ける「海の森づくり」も発想の転換がかかせません。2019に当協会はNPOを解散し、任意団体「海の森づくり推進協会」として再出発し、益々の発展を期待しております。今後ともご支援の程よろしくお願い致します。（松田恵明記）
19. 東京海洋大学との関係：2000年に入って、故山本忠日本大学名誉教授の寄付1000万円をもとに、松田恵明は国際漁業研究会会長として日本で2004年開催予定の第12回IIFET（国際漁業経済学会）の開催を計画し、会場として東京海洋大学を考へ行動していた。この準備として、高井学長はじめ多くの東京海洋大学関係者と親しくなった。当初東京海洋大学同窓会が事務局を担当するということになり、東京海洋大学では全学挙げての取り組みとなった。しかしながら、しばらくすると、事務局の人件費が嵩み、このままでは、やってゆけないということになり、東京事務局は閉鎖され、松田がいるボランティアの鹿児島大学事務局に移転した。その結果、難関は乗り越えられ、第12回IIEFTは無事終了した。参加者は外国人250人を含む計500人で、国際色豊かなものとなった。これは東京海洋大学でも高く評価され、その後、松田がかかわる「海の森づくり」や「日台漁業経済セミナー」など東京海洋大学の会場がよく使われるようになった。お世話になった東京海洋大学の皆さんには厚くお礼を申し上げます。